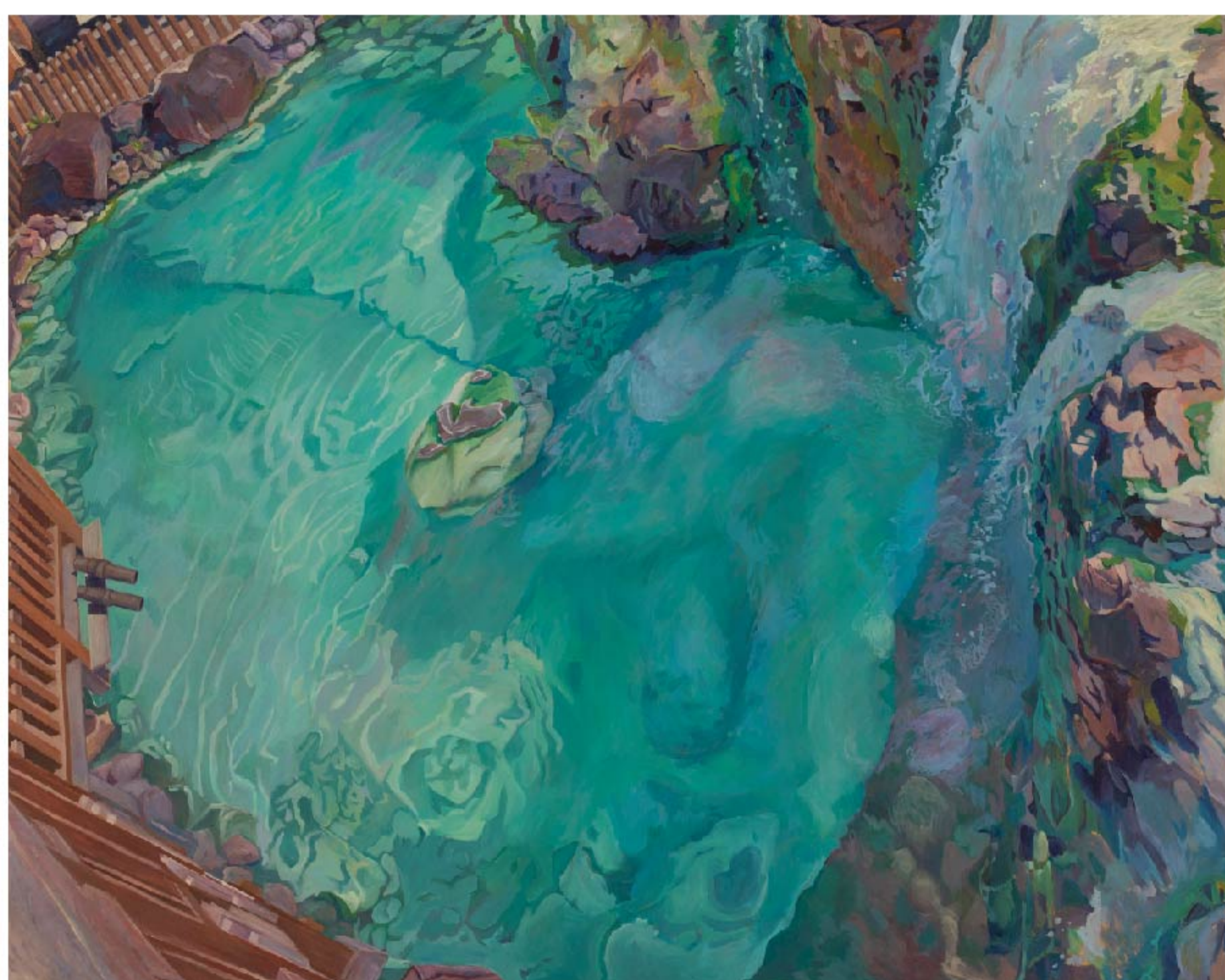


伊藤 朋子
ITO Tomoko



休戦

油彩、キャンバス



敬愛

油彩、キャンバス



婉麗

油彩、キャンバス

— 私自身と鑑賞者の魂が揺さぶられる風景を描く —

大学院への進学前後にコロナ禍となった。外出する機会が減り人気の少ない夜間に一人で散歩をした時に取材した雨の風景を連作で三点描いた。いずれも傘の中から外界を見ている風景で、鑑賞者がストーリーの主人公になる構図をとり、慌ただしい外界をどこか逃避しているような雨の日のプライベート空間を表現した。作品制作を進めるうちに、描くモチーフは、傘の中から世界を見ているといった個人的な世界感から、花や自然といった普遍性のあるテーマへと変化していった。私は慈しむべき対象を描くことを無意識に求めていたのかもしれない。大学院二年生の前期には、画面いっぱいに黄色と白の花々をF100号に描いた。コロナ禍により家で過ごす時間が増え、暗いニュースばかりで心が落ち込んでいたが、花がある生活は私の心の支えとなった。

修了制作で選んだモチーフは「草津温泉」である。火山活動によって湧き出た温泉水は滝のように流れ落ち、温泉水を浴びた岩は化学変化により白や緑へ変色していく。私は現場で一定の時間佇み、観察とドローイングを重ねた。湯面を凝視するにつれエメラルドグリーンの発色がまるで異界への入口のように感じられてきた。原型を留めず、たえず形を変えていく草津温泉の湯畑を主題に、私は自然が作り出した産物の美しい一瞬を切り取りたい衝動に駆られた。作品では写真には写りきれない熱感や湿度の表現にこだわった。温泉から沸き立つ湯気を画面に留めるにあたって、変容し続ける水蒸気や衣服越しに感じた熱をどのように描くのか。いまだ模索中ではあるが、今回の制作を通して「変化を画面に留める」という自分にとっての新たな視点の発見に繋がった。タイトルは「休戦」である。疫病の災禍に出かけた温泉の煮立った源泉の湯本をみて私はふと考えた。戦争や病気がなくならないこの日常の中で、火山活動と癒しとは自然が時間をかけて作り出した無償の愛や優しさのようなものだ。

私は私自身と鑑賞者の魂が揺さぶられる風景を描いていきたいのである。